

十二支で申年の今年は、十干では、竈の燃え盛る火を意味する丙。戦後2度目の丙申を、60年振りに迎えました。

奇しくも前回の1956年昭和31年は僕の生年。改めて年表を繰ると、「高度経済成長」へと踏み出していく。日本の光と影を隠喩している印象を受けます。

前年に発足した日本住宅公団の第1号団地が大阪府堺市に完成。東海道本線が全線直流電化。他方で原子力政策の最高

決定機関として原子力委員会が設置され、程なく科学技術

庁へと総理府原子力局は看板を書き換えます。

水俣病第1号患者が公式確認され、佐久間ダムが竣工。自動車損害賠償責任保険の加入も義務化されます。石原慎太郎氏が『太陽の季節』を上梓する一方、大宅壮一氏は「一億総白痴化」の警句を発しました。

別けても象徴的なのは、「日本経済の成長と近代化」の副題を冠して同年に発表された「経済白

連載

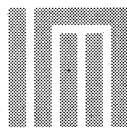
第8回

# ささやかだけど、 たしかなこと。

田中康夫

You are the Hope for Tomorrow.

## 2016年、戦後2度目の丙申 「富国裕民」ジャパンを目指せ!



書。「年次経済報告」が正式名称の同白書は、第2代小錦八十吉の長男だった経済企画庁調査課長・後藤譽之助氏が執筆し、「もはや『戦後』ではない」と打ち出します。「消費や投資の潜在需要はまだ高いかもしれないが」「いまや経済の回復による浮揚力は使い尽くされ」「もはや『戦後』ではない」。

「戦後10年我々が主として生産量の回復に努めていた間に、先進国の復興の目標は生産性の向上にあった」。「数量景気の結果に酔うことなく」「新しい国造りに出発することが当面喫緊の必要事」。

焦土と化した日本が復興を終え、「量の拡大」を目指すバラ色宣言。そう理解する向きが今でも過半を占める件の惹句は、豈図らんや、「量の拡大」から「質の充実」へと、発想の転換こそが日本には必要だと指摘していただきます。

「丙申は大変革の年？」の見出しで藤原章生編集委員が担当した昨年12月7日付『毎日新聞』夕刊「特集ワイド」でインタビューを受け

た際も、「誤読され続けてきた」  
惹句に言及しました。

丙申の1956年は、超少子・  
超高齢社会に直面する日本にとつ  
て、別の意味でも象徴的な年。姥  
捨て山を扱った深沢七郎氏の『檀  
山節考』を三島由紀夫氏が激賞し  
た同年、日本の加盟を認めた国際  
連合に対してWHO世界保健機  
関が、65歳以上の老年人口比率  
「高齢化率」の定義を示す報告書  
を提出した年でもあるからです。

7%で高齢化社会。14%を超え  
ると高齢社会。21%で超高齢社会。  
70歳を過ぎても多くの方々が元氣  
に仕事を続ける日本だけでなく、  
平均寿命が極めて短い国々も含め  
た地球規模での設定基準は、現在  
も変更されていません。

日本の高齢化率は当時、5・3  
%でした。7・1%に達したのは  
1970年11昭和45年。「人類の  
進歩と調和」を掲げて日本で最初  
の万国博覧会が大阪の千里が丘で  
開催された年です。アポロ計画で  
持ち帰った月の石を展示するアメ  
リカ館に長蛇の列が出来たのを想  
起します。そうして昨年、日本の

高齢化率26・7%。世界屈指です。

高齢化元年の1970年、日本  
の合計特殊出生率は2・13でした。  
合計特殊出生率とは、一人の女性  
が一生に産む子供の平均数を示す  
人口統計上の指標。日本の公衆衛  
生を勘案すると、2・07で推移し  
た場合に、ほぼ横ばい状態を保ち  
ます。国立社会保障・人口問題研  
究所2社人研の推計です。

「なんとなく、クリスタル」を執  
筆したのも、今から36年前の申年  
1980年でした。

同年の合計特殊出生  
率は1・75。更に低  
下し、一昨年は1・  
42。何れの数値も、「一億総活躍  
社会」が掲げる「希望出生率1・8」  
に遥か及びません。

因みに「希望出生率1・8」なる  
耳慣れぬ概念は、増田寛也・元岩  
手県知事が座長を務める「日本創  
成会議」の発案。独身者の9割が  
結婚を望み、既婚者が望む子供の  
人数は2人との世論調査が「根拠」  
なのだとか。そして、その一民間団  
体が提唱する「2×0・9」11「希  
望出生率1・8」なる八卦見の



如き託宣を信じて疑わぬメディア  
も少なくない日本の「眠度」です。  
閑話休題。「今後の成長は近代  
化によって支えられる」とも記さ  
れた60年前の「経済白書」を再び  
援用しましょう。

「近代化トランスフォーメーシ  
ョン」とは、自らを改造する過程  
である。「そして自らを改造する  
苦痛を避け、自らの条件に合わせ  
て外界を改造(トランスフォーム)  
しようという試みは、結局軍事的  
膨張につながった」。

歴史を振り返れ  
ば、日露戦争に「勝  
利」した前後の日本  
の人口は、現在の半分にも満たぬ  
約4700万人でした。が、その  
後の人口増加と軌を一にして、跳  
梁跋扈する富国強兵の「大日本  
主義」が、国民を奈落の底へ突き  
落とします。

戦前から『東洋経済新報』で終  
始一貫、膨張主義を諫め、富国裕  
民の「小日本主義」を説いた石橋  
湛山氏が首班指名されたのは、60  
年前の1956年12月23日です。  
相通する心智で「田園都市国家」

としての日本の再構築を説いた大  
平正芳氏が急逝したのも申年19  
80年でした。

「2020年を目途にトレンドを  
変えていくことで、50年後にも1  
億人程度の安定的な人口構造を保  
持」と一昨年6月24日に「骨太方  
針」を閣議決定した「量の維持」  
と異なり、「質の深化」へと認識  
を変え、選択を替えるべきと両氏  
は捉えていたのです。

「もはや『戦後』ではない」は、  
英文学者の中野好夫氏が『文藝春  
秋』56年2月号に寄稿した論考タ  
イトルでもあります。「軍事力に  
頼らない、質の高い小国を目指せ」  
「小国の新しい意味を認め、それ  
を人間の幸福の方向に向かつて生  
かす新しい理想をつかむべきであ  
ろう。古い夢よ、さらば」との。

「この一年を振り返ると、様々な  
面で先の戦争のことを考えて過  
した一年だったように思います」。  
これは、昨年末の誕生日に際し宮  
殿石橋の間で会見した今上天皇の  
発言です。戦後2度目の丙申。果  
たして如何なる大変革の年になる  
のでしょうか。

田中康夫「ささやかだけど、たしかなこと」は  
今号から毎週連載となります。